

「どうだ、まだ追っかけて来るか見てごらん。」と、火の目小ぞうに言いつけました。火の目小ぞうは、さっそくのび上がって見ますと、兵隊が今やっと、さっきの林をくぐりぬけて、またどンドンすなけむりを立てて、かけつけて来るのが見えました。王子は、「では、グズグズしてはいられない。さあにげよう。」と言って立ち上がりました。すると王女は、「いえいえ、だいじょうぶでございます。もうすこし休んでいらっしやい。」と言いながら、目からなみだをひとしずく流して、「さあなみだ、大きな河になっておくれ。」と言いました。すると、たちまちそこへ大きな大きな河ができました。王子はそれで安心して、また王女の手をとってにげました。みんなは、長い間どンドン走り続けて、もうこれならだいじょうぶだろうと思いながら、しばらく休みました。「どうだ、まだ追っかけて来るか。」と、王子はもう一ど火の目小ぞうに見させました。火の目小ぞうは後ろを向いて、つま先立ちをして、「おやとうとうあの河をわたって、また追っかけてまいります。」と言いました。王女はそれを聞くと、「どういたしましょう。もうわたくしの力ではどうすることも出来ません。どうにかして、この昼を夜にするくふうはないものでございましょうか。」と言いました。するとナガナガは、「ああ、それなら簡単です。」と言いながら、体をするするのばしました。そして、アッと言う間に天までのび上がりました。みんなはビックリして、何をするのかと見て見ますと、ナガナガは高い高い雲の中でぼうしをぬいで、そのぼうしを、ひょいとお日さまのかた側へかぶせました。すると下界は王子たちのいる方に光がさすだけで、兵隊がかけてき